「教育マネージメント演習」「教室集団の人間関係」の実践を通して

松尾直博

1. 「教育マネージメント演習」について

(1) カリキュラム上の位置づけ

教養科目(総合学芸領域)。2 単位。VII 期(標準履修学年 4 年春学期)。集中形式。

(2) 授業の到達目標及びテーマ(シラバスより)

学校と地域とが連携して児童生徒の発達支援を行うプログラムの企画・立案・実施といった一連のプロセスについて体験的に学ぶ。学校に関わる様々な立場の人が連携するチームアプローチについて学ぶ。

(3) 授業の概要(シラバスより)

学校と地域とが連携して児童・生徒の発達支援を行うプログラムについて、及び学校と地域、保護者との連携にはどのようなことが重要であるかについて学ぶ。近隣の地域で行われている活動(学校で行われるキャンプ(以降、「学校キャンプ」と表記)を予定)に実際に参加し、企画・立案・実施について体験的に学ぶ。

(4) 履修者

学校教育系 2 名(初等教育教員養成課程と中等教育教員養成課程の 4 年生それぞれ 1 名)、教育支援系 2 名(生涯学習コース 4 年生 1 名、カウンセリングコース 4 年生 1 名)の合計 4 名の学生、加えて他県から派遣されている小学校の現職教員の研究生 1 名が聴講という形で座学の授業には参加した。

(5) 授業の実際

初回の授業でシラバスに基づいて授業の到達目標及びテーマ、授業の概要について講義を行った。その後 4 回にわたり、大学内で講義・演習を行った。教育における学校と地域の連携、学校と地域が連携したプログラムについて、学校と地域へのチームアプローチについて理解を深めることを目的とした。「次世代の学校・地域」創生プラン(平成 28 年 1 月文部科学大臣決定)の実現に向けて」の資料を配付し、授業担当者が解説を行った。また、地域学校協働活動等を紹介する Web ページ「子供たちと未来のために。地域全体で学びあい支えあう仕組み作りの推進」(厚生労働省)を見て、様々な地域学校協働活動について理解を深めた。さらに、「地域と学校の連携・協働の推進に向けた参考事例集」(文部科学省・生涯学習政策局・初等中等教育局:平成 28 年 4 月)をそれぞれの履修者が読み、興味をもった事例について発表するということを行った。発表者は取り組みの特徴やどの点が興味深かったのかを発表し、他の履修者と質疑応答を行った。授業に関連する議論の中では、「学校と地域の協働について、このようなプランが考えられており、取り組みが始められていることについて全く知らなかった」「学校と地域が協働することにより、子

供たちの発達を促す上で大きな可能性があると思った」等の意見が聞かれた。特に興味深かったのは、教育支援系の一人の学生から、学校教育系の学生に対して「大学の授業の中で社会教育について学ぶ機会はあるのか?」という質問があり、それに対して学校教育系の学生から「社会教育については学ばない」という回答があり、議論が活性化したことである。教育支援系の学生からは、社会教育は非常に重要なものなのに、教師を目指す学生がよく分かっていなかったり、大学の教員養成が軽視していることが残念だという発言も見られた。

学生のスケジュールの希望等を調整し、4 名の学生が 4 つの小学校の学校キャンプに参加することが決まった。なお、この学校キャンプの行政側の担当は市の社会教育課である。学生は、それぞれの学校キャンプの実行委員の方(保護者や地域の方)に連絡を取り、打ち合わせ会に参加したり、メールでやりとりをする等の活動を行った。学生は、キャンプにおいてレクリエーション係、食事係等として参加することになった。7 月中旬から 8 月下旬にかけて、学生が参加するキャンプが実施された。4 校中、1 泊のキャンプが 3 校、でイキャンプ(日中に実施。夜に解散)が 1 校であった。学生は、レクリエーションの進行のサポートをしたり、児童が活動をする際のサポートをしたり、食事の準備をしたり等の役割を担った。保護者や地域の方と活発にやりとりをし、キャンプを運営する貴重な機会を得て、無事にキャンプは終了した。授業担当者は、4 つのキャンプを訪問し、学生の様子を確認したり、保護者、地域の方、教員、視察に来ていた教育長と言葉を交わした。保護者や地域の方からは、学生が来てくれた大変助かったというお言葉を多くいただいた。

4 つのキャンプが終了した 8 月下旬に、振り返りの授業を行った。参加学生はこの日までに作成したレポートを基に、各自の活動の発表を行い、それを題材に議論を行った。議論の中心となったのは、保護者や地域の方が、学校キャンプの運営を担うという点の是非についてである。学生によっては運営に参加した保護者はどの方も意欲的、積極的で、楽しみながら運営に関わっていたという感想を持つ者がいた一方で、積極的な保護者とそうでない保護者の温度差があった、準備段階も含めて教師と比べると保護者の運営は効率的でないと思われる場面もあった等の感想を述べる学生もいた。

もう一つ議論の中心になったのは、このような夏休みや週末に学校で実施されるキャンプに、教員は参加すべきかについてである。どのキャンプでも、教師が少しだけレクリエーションに参加したり、児童と一緒に夕食を食べたり、備品や設備の準備をしたり等の様子が見られた。しかし、教師がもっとキャンプに参加することができれば児童も喜ぶし、内容や進行も更によくなるのでは、という意見も聞かれた。その一方で、教師の働き方改革を考えても、この取り組みには教師の参加を望むのはよくないことではないか、保護者や地域が運営の中心であることが意味があるのではないかと言う意見も聞かれた。また、自分よりも年下のボランティア(専

門学校生、高校生、中学生)の活躍ぶりに可能性を感じたという意見もあった。

(6) 拡張型カリキュラムの観点からの考察

本授業は、実際に行われる学校キャンプに学生がボランティアとして参加し、その準備も含め保護者や地域の人と交流し、地域と学校との協働について学ぶものであった。座学で地域と学校の協働について学んだ上で、学校キャンプの運営に参加し、振り返りの授業とレポート作成を行うという点から、サービスラーニングの一つの事例と言えよう。保護者、地域の人、他のボランティア(専門学校生、高校生、中学生等)、教員との緩やかな関係の中で主体的に判断・行動していく経験ができたと同時に、もう少しこうできたのでは、自分が教師になったらこうしたいという発想も自然に生まれていた。また、拡張型学習(山住, 2014)述べられているような「矛盾」と向き合うような学びになったとも思われる。学校という場で行われるキャンプであり、教員は児童をまとめたり、活動させたり、学ばさせたりすることに一般的に長けている。だから学校キャンプの運営の中心は教員がよいのでは。いや、それでは意味がない。上手でなくても、効率的でなくても、保護者や地域がこの取り組みの中心になることが、意味のあることなのだ、というような考えに学生は揺れていた。

地域学校協働の試みは、現在まさに新たに展開している最中である。そういった意味でまさに拡張型学習が扱う「まだそこにないもの(whatisnoyetthere)」の学びとなる授業であったと思われる。

2. 「教室集団の人間関係」について

(1) カリキュラム上の位置づけ

学校教育系:専攻科目(共通 SE(選択)。教育支援系:教育基礎科目(教科又は教職(選択)。2 単位 IV 期(標準履修学年 2 年秋学期)。木曜日 4 限。講義形式。

(2) 授業の到達目標及びテーマ(シラバスより)

いじめが生じない学校・学級づくり、誰もが通いたくなる学校・学級づくりについて、学級集団、人間関係の観点から理解する視点を身につけ、実践への基礎力を高めることをねらいとする。必要な知識を身につけると共に、思考力、判断力を高めることも目標とする。教師や教育支援人材として、教育に貢献できる人材となるための力を身につけることを目標とする。

(3) 授業の概要(シラバスより)

いじめや不登校について、どのようなことが課題となっているのか、国としてはどのような指針があるのか、どのような角度から問題をとらえればよいか等について学ぶ。学級集団、学校における人間関係、それらの問題について理解を深めるために、社会心理学、学校心理学、臨床心理学、カウンセリング心理学等の理論や研究成果について学ぶ。上記のような学びを経て、学校における集団や人間関係の問

題について、どのように未然防止を計画・実施し、問題が生じたときにどのように対応すればよいかについて、グループワーク、でィスカッション等を通じて、学びを深める。ゲストティーチャーによる講話も予定している。

(4) 履修者

学校教育系 171 名、教育支援系 43 名、加えて修士課程院生 1 名、県から派遣されている小学校の現職教員の研究生 1 名、韓国からの教員留学生 1 名、合計 217 名が参加した。この授業は選択必修のような位置づけであり、学校教育系学生はいくつかの共通 SE 科目から、教育支援系学生はいくつかの教育基礎科目(教科又は教職)からこの授業を選んで履修したことになる。

(5) 授業の実際

第 1 回では、学校における集団や人間関係の問題にはどのようなものがあるかについて考えさせ、一つの視点として社会構築主義の考え方について概説した。第 2, 3 回では、いじめについて、法律的な観点、でータ・エビデンス・ファクトの観点、様々な理論や言説について紹介した。第 4, 5 回目では、不登校について、法律的な観点、でータ・エビデンス・ファクトの観点、様々な理論や言説について紹介した。第 6 回目では、いじめや不登校についての講義のまとめと共に「Society5.0 時代の教育」(文部科学省)、「未来の教室」と Edtech 研究会第 1 次提言」(経済産業省)等を示し、学校教育を巡る新しい動きについて解説した。第 7 回目では、学級集団の成長を促すエクササイズ、プログラム、ワークショップ等について学んだ。

第 8 回目では、元公立中学校教員で現在他大学で教授を務めるゲストティーチャーに来たいただき、教師と児童生徒との人間関係、児童生徒同士の人間関係について考える機会とした。第 9 回では、ゲストティーチャーの先生の講義を振り返り、改めて教室集団の人間関係にはどのようなものが求められるのかを考えた。第 10 回目は、法教育、子どもの人権問題、学校におけるいじめ予防教室で活躍されている弁護士の先生にゲストティーチャーとして来ていただき、法律の観点から見たいじめ問題について御講義をいただいた。第 11 回目は、ゲストティーチャーの先生の講義を振り返り、関連機関との連携、学校教職員以外の専門家の役割について考えた。第 12 回目は、これまでの講義全体を振り返り、未来の学校・教室はどのようになっていけばよいのか、公教育はどのように変わっていくべきなのか、学校以外の教育機関はどのような可能性があるのか、等について考えた。

第 13 回、14 回目は提言発表会・交流会を行った。履修者にはおよそ 1 か月半前に「いじめが生じない学校・学級づくり、誰もが通いたくなる学校・学級づくりについて、主に学級集団、人間関係の観点から提言を行ってください。」という課題を出している。本授業で工夫したのは、提言発表はレポートだけではなく、小説、ポスター、漫画、イラスト、詩画、動画、口頭発表、その他ステージ発表等の形式を自分で選んでよいこととした。製作物は、提言発表会の前に Webclass(本学が導

入している e-Learning システム)上にアップさせており、ピアレビュー機能を使って履修者は他の全ての履修者の作品を事前に見ることができる。提言発表会・交流会は、履修者を 2 つ(第 13 回と 14 回の発表日)に分け、それぞれの回で 100 人程度が発表した(動画のみグループ発表が可で、他の全ての発表形式は個人発表)。口頭発表 2 名、動画 1 グループ(3 名)、楽曲製作 1 名は、履修者全員の前で発表した。その他の発表者は決められた座席表に座り、プリントアウト等した作品を見てもらえる状態にする。その日に発表しない履修者は、自由に教室中を移動し、発表している履修者に声をかけ、自由に交流する。履修者には市販されている「いいねシール」を渡し(一人あたり 25 枚。希望により追加する)、いいと思った作品の制作者の名前が書かれた A4 の用紙(制作者の席に置いてある)にシールを貼ることができる。ある程度時間が経ったところで、その日の発表者も座席を離れて、教室を移動して、誰とでも交流してよい時間を設ける。他の履修者の提言を見ることと、互いに対話し、交流することを狙いとした。

第 15 回は、今までのまとめをした後、NHK いじめを考えるキャンペーンの一環として行われている「マだ友プロジェクト～未来の友だちとの手紙～」の「手紙の返事を書こう」を実施した。これは全国から寄せられた、いじめを中心とする様々な悩み(手紙)について、手紙の返事を書くというプログラムである。悩み等の文面が印刷された用紙を履修者の人数分送ってもらい、授業時に履修者にランダムに配布し、その返事を履修者が自筆で書くものである。履修者の氏名はニックネームで書くようになっている。履修者の書いた手紙の返事は、NHK の担当者の確認の後、NHK の Web ページに掲載される。本授業で学んだこと、考えたことを生かして、既に誰かの力になれることを履修者に体験させる目的がある。

(6) 拡張型カリキュラムの観点からの考察

本授業のハイライトは第 13, 14 回に行った提言発表会・交流会である。授業担当者は、教育に関するコミックマーケットをイメージして、この発表会・交流会を設定した。最終レポートからは、この提言発表会・交流会で学ぶことが多かったと書いている記述が多く見られた。同じ学科(注:「学科」は学生が非公式に用いる呼び名。実際には専攻・選修・コースのこと)の学生だけの授業では似たような意見ばかりになってしまうが、この授業は他の学科の学生の意見に触れることができて刺激になった、多様な意見を知ることができた、驚いた、もっと話してみたいと思った、改めて本学学生のポテンシャルを感じた、他の学科の学生から意見をもらえてうれしかった、同じ形式で他大学の人と交流することをやってみたい等の感想が見られた。

学校教育系の学生からは、本学の教育支援課程の学生がどんな専門性をもっているのかが分からなかったが、知ることができたという意見が、教育支援系の学生からは将来教師になる学生の考えを知ることができてよかったという意見が聞かれ

た。いじめ、不登校等、様々な取り組みがなされているにもかかわらず、解決、改善が見られていない問題に対して、どのようにすればよいか。これもいわば、「まだそこにないもの(whatisnoyetthere)」の学びと言える。このような問題について、学内の学生同士という限定された中ではあるが、学校教育系、教育支援系の境界を越えて、自分の提言という材料をもって自由闊達に交流することにより、「ノットワーキング(knotworking)」の芽生え、兆しを目にすることができた。

2回のゲストティーチャーによる講義も、学生の学びを深める重要な役割を果たした。中学校教員として優れた実践を続けてきた方、また弁護士という教師ではない立場、学校外の専門家という立場の方からの講義は、学校教育と教育支援の可能性を感じ、新たな視点を受講者に与えることになった。

提言発表会・交流会、そして半期の講義全体の中で明確になった論点、拡張型学習でいうところの「矛盾」には次のような2点があった。1点目は、これからの教育では「学級での人間関係を強めるべきか、それとも弱まるべきか」という点である。強めるべき(クラス内の教師－児童生徒、児童生徒間関係を密にすべき)という意見は、いじめや不登校という教育課題は人間関係の希薄化に由来するという考えに基づいている。弱めるべき(異学年交流、学校外の人との関わりを増やすべき)という意見は、いじめや不登校という教育課題は、閉鎖的で流動性を欠く人間関係を学校・学級が強制するから生じているという考え方に基づいている。2点目は、いじめ・不登校の課題を改善・解決するためには個の児童生徒へのアプローチ(個に合わせて、個に寄り添った支援等)が有効である、あるいは学校・教育・社会の改革(一斉授業の削減、学校外の学びの促進等)というアプローチが有効であるという点である。このような「矛盾」について、履修者は本講義の前には考えたことがなかったという意見が多く聞かれた。そして、提言発表会・交流会で学校教育系・教育支援系、様々な専攻・選修・コースという境界を越えて対話することにより、自分の考えが磨かれた、視野が広がったという意見が聞かれた。この授業で明らかになった「矛盾」は、学問において、あるいは現実の教育現場では既に解決されているものではなく、まさに今課題となっていること、あるいは課題であることすら気づかれていないことであると言えよう。この「矛盾」と向き合い、自分なりの意思を持つようになったことは、この授業の成果の一つと言えよう。

本学のように、大規模な教員養成大学においては、様々な専攻、選修、コースがあり、それぞれの専門性を深めた教師や教育支援人材を養成している。しかし、規模が大きいが故に、専攻、選修、コースという境界を越えた交流を意識しなければ、「隣は何をする人ぞ」という感じになり、多様な専門家を養成しているよさが発揮できない。本授業を履修した学生からは、最終的には、もっと他専攻、他コースの学生と交流したいという要望が多く聞かれた。しかし、この授業を履修していない学生たちからは、他専攻・選修や他コースの人と一緒の授業は嫌だ、同じ専攻・選

修やコースと人たちとだけ学んで、専門性を深めたいという意見も聞かれることもある。協働や連携の重要性が叫ばれている中、既に学生の段階で閉鎖性、自己完結性が強いのはなぜなのか、そのことが教育支援協働の実現においてどのような意味があるのか、改めて考えていきたい。